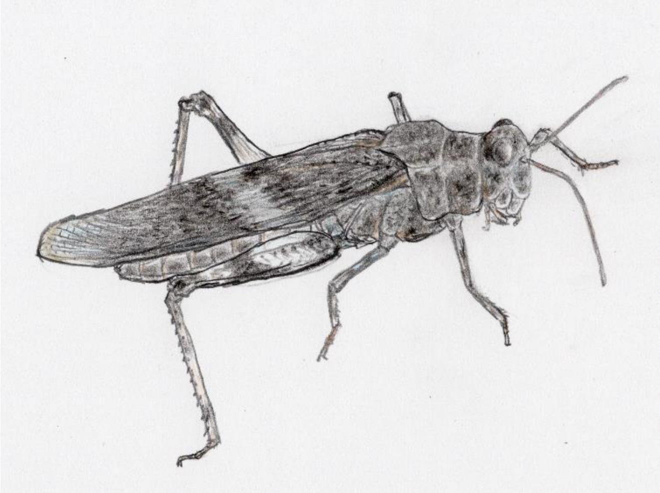
ISSN 2185-9817



自然遊学館だより

No.105

2023 WINTER

2023. 2. 28 発行 貝塚市立自然遊学館

今号の一葉　「カワラバッタ」
　河原の石に溶け込むような保護色をした擬態のプロフェッショナル。後翅の鮮やかな青い色が特徴的。日本特産種。
　大阪府レッドリスト 2014「絶滅種」。

目　　　次

＊ ネイチャーレポート
マ族の話 …… 岩崎　拓 … 1
マエジロアツバ …… 岩崎　拓 … 2
大阪府絶滅種となったカワラバッタを求めて …… 鞍井希凪 … 3

＊ 行事レポート
近木川のアユを調べよう！ …… 山田浩二 … 4
水間寺周辺の陸産貝調べ …… 児嶋　格 … 5
海藻おしばで万華鏡作り …… 秋山芳樹 … 7
ワークショップ　アンモナイトの断面標本を作ろう！ …… 髙田雅彦 … 8
貝塚市市民文化祭に出展して …… 鞍井依子 … 9
「科学系博物館の活性化への助成事業」を受けて …… 天満和久 … 10
「生態標本」作製秘話 …… 天満和久 … 11
「貝塚市子ども博士育成事業」を終えて …… 秋山芳樹 … 13

＊ 泉州生きもの情報
二色の浜でのアカウミガメの死亡漂着 …… 山田浩二 … 14
ナギサスズが導く出会い …… 天満和久 … 15
自然生態園でカスリウスバカゲロウの幼虫を発見 …… 鞍井希凪 … 16
自然生態園で見つかった寄生蜂 …… 天満和久 … 17
岸和田漁港で水揚げされたカタボシイワシ …… 山田浩二 … 19

＊ 調査速報
せんごくの杜にミヤマホオジロ …… 岩崎　拓 … 20
貝塚市二色の浜と近木川周辺の鳥調査 26 …… 鈴子勝也 … 20

＊ 追悼
元顧問・保田淑郎先生を偲んで …… 澤田智子 … 21

＊ 館長コーナー
『30 周年を迎える自然遊学館』 …… 秋山芳樹 … 22

＊ 皆様からの情報コーナー
寄贈標本・写真 …… 23

＊ スタッフ日誌 …… 25

ネイチャーレポート

マ族の話

とある勤務日、展示キャプションに使うマイワシ、ウルメイワシ、カタクチイワシの説明文を考えることになりました。マイワシは漢字で真鰯と書きます。魚類には他に、マダイ、マハゼ、マゴチなどもいて、いずれも旨いから「真」が付けられたのかなと思いました。海産の生きものには、魚類の他にも、マダコ、マガキ、マナマコ、マヒトデ、マボヤなどがいて、いずれも食用になります。

マイルカ科のマゴンドウは、自然遊学館の展示ホールに骨格標本があります。ダブルでマが付きます。淡水産ではマシジミが思い浮かびます。マ族は水の生きものだけとは限りません。鳥では、マガン、マガモ、マヒワ、植物では、マアザミ、マグワ、マコモ、マダケなどがあります。節足動物では、マダニやマザトウムシなどがいます。食用だけでなく、有用性や、そのグループを代表するという意味もありそうです。

真鰯　真鯛　真鯊　真鯒

真蛸　真牡蠣　真海鼠　真海星

真海鞘　真海豚　真巨頭　真蜆

真雁　真鴨　真鶸

真薊　真桑　真菰　真竹

真壁蝨　真座頭虫

図．本文中に出てくるマ族の漢字
（登場順に並べています）

代表という意味では、マ族の他に、ホン族があって、水産では、ホンベラ、ホンモロコ、ホンヤドカリ、キノコではホンシメジやホンショウロが思い浮かびます。植物のホンツゲやホンマキ、ヘビのホンハブなどは正式名ではないようですが、ホン族に入れておきましょう。

ここまで書いてきて、お気づきの方もおられると思いますが、生きものの世界で最も種数が多い昆虫で、マ族を思いつかないのです。不勉強だったら、すみません。ホン族はホンサナエのほか、調べると、ポツポツとマイナーなものが出てきます。昆虫では、ナミヒラタカゲロウ、ナミテントウ、ナミハナアブ、ナミニクバエ、ナミアゲハなどが「普通の」という意味で、ナミ族を形成しています。昆虫にマ族がないことは、植物に可哀そうなイヌ族があるように、有用性がない事や命名の伝統によるのかもしれません。

もう少し付け足すと、昆虫以外の陸上節足動物では、先に述べた、マダニやマザトウムシのほか、ホンワラジムシやナミコモリグモがいます。クモの仲間も昆虫と同じく、マ族はいないようです。水産では、ナミマツカサという魚やナミウズムシがいます。ナミハタやナミウツボは「波」の字を当てるようなので、ナミ（並）族からは除外しました。

以上の文章は、真人間ではない虫屋があまり調べもしないで、ササっと書いたものだと、読み流してください。これから DNA 解析によって、昆虫の種や上位分類群が細分化される際には、ホン族やナミ族が増えると予想されますが、マ族は採用されないかもしれません。でも、和名には命名規約がなく多数決方式で決まっていくものなので、これから昆虫食が普及して、「こんなに旨かったんや」という虫が見つかれば、マ族に編入される、・・・・なんてことはないかな？

（自然遊学館わくわくクラブ、岩崎 拓）

マエジロアツバ

本誌 65 号で、幼虫が菌類を摂食する蛾として、キノコヒモミノガを紹介しました。その後、千石荘（せんごくの杜）以外でも、馬場や和泉葛城山で、同様の嚢を確認しています。

今回は、食菌性の幼虫期を持つ別の蛾を紹介します。それは成虫の確認の方が先でした。千石荘で樹幹に止まっていたマエジロアツバです（2006 年 7 月 25 日採集：それ以前にも、黒子浩先生が少年自然の家で 1995 年 6 月 24 日に採集した標本が自然遊学館に所蔵されています）。

図 1. マエジロアツバ成虫
貝塚市馬場　2014 年 7 月 29 日
（ヤガ科、学名、*Hypostrotia cinerea*）
樹幹に下向きで止まっています

図 1 は、馬場産で 3 個体目の標本になったものです。前翅の前縁がクリーム色をしています。図鑑などで調べると、幼虫はカワラタケなどを摂食すると書かれていて、「なるほど成虫の翅の模様と止まった姿が何となくカワラタケに似ているな」と気に留めていました。若いカワラタケは、縁が白っぽい色になります。

2022 年 4 月 15 日、自然遊学館のせんごくの杜講座に参加した時、山口隼平さんから居場所を教えてもらった幼虫がマエジロアツバでした（図 2）。広葉樹の落枝を覆う幼菌の縁近くにいて、指をさして教えてもらっても、なかなか見つけられませんでした。体色が背景に溶け込んでいました。

図 2. マエジロアツバ幼虫
貝塚市名越　2022 年 4 月 15 日
左側が頭部です

マエジロアツバの幼虫がいた場所の一番近くにあったケシワウロコタケを採集して、幼虫に与えると摂食しました。『日本の鱗翅類』という図鑑には、食菌性の幼虫期を持つ蛾として、ヒロズコガ科（コクガやシイタケオオヒロズコガといったシイタケの害虫を含みます）やヤガ科のムラサキアツバがあげられていて、マエジロアツバはムラサキアツバと近縁です。

少し腹脚の話にお付き合いください。胸部から 3 対生えるのが本当の脚で、「昆虫は 6 本脚」と習う胸脚です。それに加えて腹部に脚を進化させた代表が、チョウ目とハチ目ハバチ類の幼虫です。チョウ目幼虫の腹脚は、腹部第 3、4、5、6 節と最終節である第 10 節にあるのが基本で（図 3）、胸脚と違う点は、関節がないことです。腹脚は、歩行以外にも、図 3 のように茎、あるいは葉の端をつかむ時に威力を発揮します。皆さんの中にも、幼虫を手にとって、腹脚の吸い付くような感触を体験された方がおられるかと思います。

図 3. フクラスズメ幼虫
右側が頭部で、ぶら下がった状態です
記号の説明 ： T は胸部（Thorax)、A は腹部（Abdomen)、数字は第何節かを示しています

マエジロアツバの幼虫は、第 3 と第 4 腹脚が退化しています（安田、2012)。腹脚の退化はシャクガ科の幼虫（尺取虫）が本家で、基本的に、腹部第 6 節と第 10 節にしか腹脚がありません。マエジロアツバの幼虫は、第 5 節の腹脚が残っているのでシャクガ科の幼虫よりは腹脚の数が多いのですが、同じような歩き方をします。腹脚を残して這いながら進む通常型より、移動方向に自由度があるのは確かでしょう。動きが目立ちやすい分、形態や体色によって視覚に頼る敵に見つからないようにしているのかもしれません。最後の 1 文は推測です。

引用・参考文献

岩崎 拓（2012） キノコヒモミノガ. 自然遊学館だより No.65：12-13.

安田 守（2012） 『イモムシハンドブック②』、100pp.、文一総合出版.

駒井古実・吉安 裕・那須義次・斎藤寿久（2011）『日本の鱗翅類 系統と多様性』、1305pp.、東海大学出版会.

（自然遊学館わくわくクラブ　岩崎 拓）

大阪府絶滅種となった カワラバッタを求めて

2022 年 10 月 29 日、吉野川の河川敷に行きました。目的はカワラバッタをこの目で確認することです。カワラバッタとは河原にすむねずみ色の一見地味なバッタです。しかし、翅を広げると見事な青色の後翅が目立ってとても綺麗です。北海道から九州まで分布しています。食性は植物食で、キク科、イネ科、アカザ科、タデ科、マメ科などの植物を食べますが、この種は他のバッタ類より肉食性が強く、他の生き物の死体を食べたり、成虫同士の共食いがあります。カワラバッタは擬態がとても上手く、飛ぶと目立ちますが、地面で静止しているとなかなか分かりません。さらに、飛翔力も高いので網を使っても採れないことがあります。

図 1. カワラバッタの印象的な後翅

この河原では、10 月下旬でも案外多く残っていて、一歩踏み出すと 2、3 匹が一斉に飛び出すことがあるほどでした。1 回目に飛んだ時に網で捕まえようとすると難しいですが、3、4 回飛ばしてから網で捕まえようとすると、あまり飛ぼうとしなくなって捕まえやすくなります。カワラバッタがいる所は大きな石と砂が混じり合ったところで、石ばかりのところではほとんど見られませんでした。

図 2. カワラバッタにとって必要な生息環境

基本的にバッタ類は土の中に産みますが、今回の調査で見つかった卵は独特な産み方をしているのを見つけました。表面に砂が着いた状態の卵塊を石の上に産んでいたのです。それを見つけた時は、独特な産み方に驚いたのと合わせて、どのようにしてこのような状態になったのか不思議に思いました。間違って石の上に産まれた卵塊に風で周囲の砂がかかっただけなのか、それとも石の上に産んだ後にメスが自分で砂をかけているのかなど。

図 3. 石の上に産まれたカワラバッタの卵嚢

後日、石の専門家の石橋 隆さんにお話をうかがう機会がありました。吉野川の河川敷と同じような河川環境が大阪に残っていないか聞きました。すると地形や地層の成分などから花崗岩類が砕けて流れ出す場所が大和川の支流の石川に、今回の場所に似た河川敷があると教えてくれました。次は 8 月にそこに調査に行きたいです。一度絶滅となったカワラバッタが大阪府内でまた見つかると面白いなと思います。

参考文献

宮武頼夫（1994）カワラバッタの分布．Nature Study，40(8)：7-9.

（自然遊学館わくわくクラブ　鞍井 希凪）

行事レポート

近木川のアユを調べよう！

日時：2022 年 10 月 1 日(土)10：00～12：00
場所：近木川下流（新井井堰下付近）
参加者：31 人（うちスタッフ 7 人）

近木川の下流では 2011 年から複数のアユが目撃されるようになり、昨年 2022 年もアユの幼魚が遡上する春から初夏にかけては若アユの群れが目撃されました。そんな中、秋を迎えた 10 月初頭に本観察会を実施しました。

調査場所は例年同様、近木川で最も下流に位置する堰堤（新井井堰）より下流側で行いました。この辺りの河川敷は、7 月に近木川クリーンキャンペーンのイベントで地域住民の方々と一緒にゴミ掃除や草本類を大掛かりに一掃して頂いていたのですが、3 ヵ月足らずであっという間に草が生い茂り、採った魚を入れる水槽を並べる会場作りのために事前に草刈りを行いました。

講師の河野通浩さんは当日朝に阪南市の

男里川で採集したアユを持ってきてこられ、生きたアユを参加者に紹介しながら行事が始まりました。川ではまず、刺し網を使って魚を捕らえる様子を参加者に見てもらいましたが、網に掛かるのはほとんどがクサフグで、アユは掛かりませんでした。

その後、参加者一斉に川に入ってタモ網で採集を始めました（図 1）。1 時間ほどの皆さんの採集で、ニホンウナギやミナミメダカなど魚類 12 種などが採れましたが、アユの姿は昨年に引き続きありませんでした。採れた生きものは、種名ラベルを貼り付けた水槽に入れて、最後に講師から説明を受けました（図 2）。

今回、観察できた生きもののリストを表 1 に記します。

図 1. 採集の様子

図 2. 採れた生きものの説明

表1. 近木川下流（新井井堰）で観察した動物

グループ			和　名
脊索動物門	硬骨魚綱	ウナギ科	ニホンウナギ
		コイ科	タモロコ
		ボラ科	ボラ
		メダカ科	ミナミメダカ
		サンフィッシュ科	ブルーギル
		シマイサキ科	シマイサキ
		カワアナゴ科	カワアナゴ
		ハゼ科	ミミズハゼ
			マハゼ
			ヒナハゼ
			ゴクラクハゼ
		フグ科	クサフグ
	爬虫綱	ヌマガメ科	ミシシッピアカミミガメ
			クサガメ
節足動物門	軟甲綱	ヌマエビ科	ミゾレヌマエビ
		テナガエビ科	テナガエビ
		モクズガニ科	モクズガニ
		ベンケイガニ科	クロベンケイガニ
			アカテガニ
	昆虫綱	イトトンボ科	イトトンボ類のヤゴ
軟体動物門	腹足綱	アマオブネガイ科	イシマキガイ

（山田 浩二）

水間寺周辺の陸産貝調べ

日時：2022 年 10 月 15 日（土）10：00～12：00
場所：貝塚市水間
参加者：32 人（うちスタッフ 10 人）
※きしわだ自然資料館との共催イベント

水間周辺では、以前 2 度の貝類観察会を行っています。今回はきしわだ自然資料館と合同で行うことになりました。観察コースは水間寺の第二駐車場を出て、秬谷川沿いの人家や畑地の間を抜け秬谷川を渡り川沿いの道を行き、再度秬谷川を渡って遍照寺の入口に至り、そこから急な石段を登り墓地の上方にある伐採木の積まれた切土法面や倒木、低灌木や落葉のたまる樹林内を観察ポイントに決めここで時間をかけて調査しました（図 1）。帰路は竹林の遊歩道を通り、陸産貝を探しながら水間公園に向かうルートをたどり公園内で同定や結果報告を行いました（図 2）。

観察会での出現種は陸産種が 22 種、淡水種が 2 種でしたが、下見と追加調査で陸産種 4 種が見つかり、合わせた今回の調査では陸産種は前鰓類 6 科 8 種、有肺類 5 科 18 種、合計 11 科 26 種が確認できました。他に淡水種が 2 科 2 種見つかっています（表 1)。

図 1. 陸産貝の採集の様子

図 2. 採れた陸産貝の解説

出現状況は第二駐車場の草本上からアワジオトメマイマイを見つけ、人家の家庭菜園脇に置かれたブロックの下方から、オカチョウジガイと草むらからはウスカワマイマイが見つかりました。また畑に水を引いている桶の周辺と排水路から、ウスイロオカチグサが多数見つかり、水路内からはサカマキガイとヒメモノアラガイの淡水種が見つかりました。遍照寺前の石段上では移動中のクチベニマイマイを見つけ、触角や眼点の観察が出来ました。遍照寺上方の切土道周辺は空が開け昼夜の温度変化があり結露しやすく露を飲み水とする陸産貝に取って適した環境であり、切土の土砂止めコンクリート壁は山地斜面の水分を受けて周辺の土壌を湿潤にして、伐採木や倒木、落葉、低灌木、樹林、石垣など陸産貝の生息に適した環境が作り出されています。ヤマキサゴ、ヤマタニシ、アツブタガイ、ヤマクルマガイはフタを持つ前鰓類で触角は 1 対、目は触角の付け根にあり比較的乾燥にも強い地上性の貝類群です。ウスベニギセル、ナミギセル、ナミコギセル、カサキビ、キビガイ、ナミヒメベッコウ、コベソマイマイ、ケハダビロードマイマイ、クチマガリマイマイ、オオケマイマイなどは有肺類に属しフタは無く触角は二対、目は触角の先端にあり地上性の種や木に登る種もいます。遍照寺周辺では多くの種が観察できました。またこの場所からは下見時にミヤコムシオイが、追加調査時には泉南の山中渓が模式産地になっているイノウエヤマトガイが見つかっています。帰路の公園までの道筋の竹林からは竹に登るチャイロオトメマイマイが見つかり、追加調査時には竹林内でギュリキマイマイの成貝 3 個体と本来地上性であるギュリキマイマイの幼貝 2 個体が 5mと 2mの高さの竹上に登っているのが観察できました。遊歩道にあるクヌギの根元からはアズキガイ（水間初記録）が複数個体見つかっています。公園に降りる石段の手すり上を這うマルニッポンマイマイの幼貝を 1 個体見つけ、公園の植え込みのアオキの葉上からウスイロシタラ（水間が模式産地）とクチベニマイマイの幼貝が見つかり、低灌木の葉上からアワジオトメマイマイの幼貝が見つかりました。以前は調査区域にしていた西側の公園の森の半分が立ち入り禁止にされていて、ササや樹木が茂り放置状態にされているのが残念

です。きしわだ自然資料館と合同で行われた観察会は多くの参加者の眼のお陰で多くの種を記録することが出来ました。

表 1. 水間周辺の貝類観察会 (2022.10.15)
水間観音第一駐車場~遍照寺~水間公園

前鰓類	
ヤマキサゴ科	ヤマキサゴ
ヤマタニシ科	イノウエヤマトガイ
	ヤマタニシ
	アツブタガイ
ヤマクルマガイ科	ヤマクルマガイ
アズキガイ科	アズキガイ
ムシオイガイ科	ミヤコムシオイ
カワザンショウガイ科	ウスイロオカチグサ
有肺類	
キセルガイ科	ウスベニギセル
	ナミギセル
	ナミコギセル
オカクチキレガイ科	オカチョウジガイ
ベッコウマイマイ科	カサキビ
	キビガイ
	ウスイロシタラ
	ナミヒメベッコウ
ナンバンマイマイ科	コベソマイマイ
	マルニッポンマイマイ？
	ケハダビロードマイマイ
オナジマイマイ科	クチマガリマイマイ
	オオケマイマイ
	チャイロオトメマイマイ？
	アワジオトメマイマイ
	ウスカワマイマイ
	ギュウリキマイマイ
	クチベニマイマイ
淡水種	
モノアラガイ科	ヒメモノアラガイ
サカマキガイ科	サカマキガイ

（記録には下見、追加調査日に確認した種も加えた）

（自然遊学館客員講師　児嶋　格）

海藻おしばで万華鏡作り

日時：2022 年 11 月 5 日(土)13：30～15：00
場所：自然遊学館多目的室
参加者：16 人（うちスタッフ 3 人）

海藻は緑藻類、褐藻類、紅藻類に分けられています（注　色で分類をしているのではありません）。身近なものでは、波打ち際で打ちあがったものをよく見ることのできるアオサ、お好み焼きで使うアオノリ。海藻サラダなどで食卓にあがるコンブやテングサなどは、充分な光を受けることのできる陸上の維管束植物と違って、生育している深さまで届く光の波長をうまく吸収できるよう、光合成色素（クロロフィル、カロテノイド、フィコビリン）の組成と含有量の違いがあることによって、より効率的に光エネルギーを受けるため、多様な色彩が現れています。

図 1. 会場のようす

海藻のおしば標本の作製は、もともと学術的な目的で始まりまったそうです。今回は海藻おしばの美しさを知り、それを入り口として海の生態系理解につながる普及活動を行っている、海藻おしば協会の前田ゆきみさんにお越しをいただき、ご指導をいただきました。

図 2. いろとりどりの海藻

最初はクイズ形式で、海面下で生きる海藻たちの美しい森の話。海洋生物によって取り込まれた CO_2 陸域生物のグリーンカーボンに対するブルーカーボン。これが温室効果ガスを緩和するうえで重要な役割を果たし、生態系の消失が熱帯雨林消失の 4 倍以上にも達することなどの話がありました。

図 3. 講師の前田ゆきみさん

昨年までは海藻おしばで様々なデザインをしていましたが、今回は万華鏡な中に入れ、美しい幾何学模様の世界を楽しみました。

図 4. 当日の会場内のようす

（秋山 芳樹）

ワークショップ
アンモナイトの断面標本を作ろう！

日時：2022 年 11 月 26 日(土)10：00～12：00
場所：自然遊学館多目的室
参加者：24 人（うちスタッフ 5 人）

当館では長らく地学行事は中断していましたが、連続して 3 回目となる地学行事「ワークショップ　アンモナイトの断面標本を作ろう！」を今年も開催することができました。

使用したアンモナイトは、北海道留萌郡小平町（おびらちょう）に分布する蝦夷層群（えぞそうぐん）上部層の泥岩層（約 9000 万年前の後期白亜紀の浅海層）から採集されたものですが、残念なことにこの産地は、1999 年に完成した小平ダムの湖底に沈みました。

断面標本の作成手順は、アンモナイトの巻きに沿ってちょうど半分の大きさになるまで粗・中・細のサンドペーパーを使って削りました。最初は粗目のもので大まかに形を作り、内部に渦巻き状の気房が少し出てきたら、中目～細目のものに替えて削り過ぎないよう慎重に渦巻きを追いかけました。室内に削り粉が舞わないように水を付けながら作業しました。仕上げに金属みがきで光沢を出して完成としました。なお、サンドペーパーで石を削る作業は、まったくの工作作業ですが、アンモナイトという生物の体の内部を調べることを目的としているので、間違いなく解剖作業に相当します。

テトラゴニテス属のアンモナイトは厚みがあり、削るのに時間が掛かるので小型のものを用意しました。ゴードリセラス属のものはゆる巻きで、断面標本が壊れないように片方のヘソに透明樹脂を厚めに塗布して補強しました。

コロナウイルス感染防止対策だけでなく、エキノコックス症感染予防対策のため、行事で用意したすべての化石の洗浄煮沸消毒を事前に行いました。

アンモナイトの在庫が減ってきたので、次回は「フズリナの断面標本作り」行事を計画しています。米粒大のフズリナ化石が密集し

た石灰岩に水をつけながらサンドペーパーで削って、ピカピカに磨いた断面標本を作製してフズリナの内部構造を観察してみましょう。

フズリナとは、古生代後期の石炭紀からペルム紀（3億4500万年から約2億3000万年前）に世界中の浅い海で大繁栄した大型有孔虫のなかまのことです。日本でもこの時代に形成された石灰岩地帯からほかの海洋生物化石とともに多産します。紡錘形（ラグビーボール型、扁長楕円体）の石灰質の殻を持つ種類が多いことから紡錘虫（ぼうすいちゅう）とよばれています。

（自然遊学館客員講師　髙田 雅彦）

貝塚市市民文化祭に出展して

11月5日（土）・6日（日）、コスモスシアターにて行われた貝塚市市民文化祭に自然遊学館が「貝塚市の自然と生きもの」というテーマで出展しました。2日間ずっと、現場に立つという試みは初めてのことのようでした。十分すぎるほどのスペースをいただき、喜びとともに大きな不安と責任を感じた準備期間でしたが、無事に2日間を終えることができました。

私たちが用意した展示は大きく3つ、ブナ林・せんごくの杜・二色の浜に分かれます。文化祭なので、単に貝塚市に自然があるというのではなく、そこに関わる人々の存在があってこその自然ということに主題をおくこととしました。パネルには説明文とあわせて、生きものの写真とともにそこで活動する方々の写真も掲示しました。またエリアごとで見られる生きもののリストや標本などの他、貝塚市全域の地図なども生きものの写真とともに展示しました。

図1. 貝塚市市民文化祭での展示ようす

とくに、ワークショップ形式での取り組みは初めてで、子どもさんたちが靴を脱いで座り込み、自由に絵を描けるスペースをつくりました。その横で、息子がリアルタイムで昆虫を描き、みんなの描き上げた作品もいっしょにして、パネルの好きなところに貼っていきました。自分の描いた作品とともに多くの子どもさんが記念撮影する姿はこちらもすごく心が和む瞬間でした。

いずれにしても、今回の市民文化祭の出展は初めてだったので、どんな来場者層なのかが分からなかったのもあり、まず通りがかりの方々にも目を向けてもらいやすいようにモニターと苔テラリウムを入口付近に設置しました。モニターには今までの昆虫調査の風景や貝塚の自然、珍しい昆虫標本などの動画やスライドショーを映し出すこととしました。通る方々も身近な風景に足を止めて思い出話を私にしてくださったり、虫や採集風景を子どもに見せよう

とする親などでにぎわいました。そして女性に人気のある苔テラリウムに足を止める方がすごくたくさんいらっしゃいました。ライティングを施したこともあり、かなりの方が立ち止まってのぞき込んでいました。

図 2. 展示した苔テラリウムのようす

「実はそれ、小さな虫も入っているんですよ！」私たちが声をかけると、その意外性に「え？」と会話が始まります。一般的な苔テラリウムは小さな瓶などの入れ物に保水性のある土と苔や石を配置したものですが、私たちが展示していたものはそこに小さな昆虫を入れたものでした。「苔を食べるバッタを入れた苔テラリウムなどはその小さな空間で生命の循環が完結していること」など、説明を聞いた方はそろっておもしろい発想ですねと喜んでくださいました。どれほどの方が腰をかがめ、小さな苔でできた世界に動くものを探し、「あーいたいた、バッタいた、コオロギいた！」と歓喜の声をあげてくださったことか。その現場に立ちあえて、とても幸せな時間を過ごすことができました。

そして、昆虫を愛する小学生の息子の姿を見て、多くの方が応援の言葉をかけてくださいました。「虫に熱中する子どもの姿が微笑ましく素晴らしいことだとはわかっていても、現実はそうもいかない。」そんな声も聞きました。「頑張ってね、応援してる！」そう言ってくださった方々もいました。

貝塚の豊かな自然の中をかけめぐる生きもの好きの子どもたちの姿を届けたいと切に思いました。そんな光景が増えるよう、これからも頑張っていきたいと誓った２日間でした。

（自然遊学館わくわくクラブ　鞍井 依子）

「科学系博物館の活性化への助成事業」を受けて

今回、一般財団法人全国科学博物館振興財団の「科学系博物館の活性化への助成事業」に応募し、2022 年 11 月 10 日決定の通知をいただきました。テーマを「自然史標本の新たな活用方法とジオラマ制作による企画展の開催」として申請をしました。

近年、昆虫類をはじめとする動物群や植物なども標本を作製する機会がさまざまな理由で少なくなってきているような気がしたので、初めてのことでしたが、助成事業に申請して、改めて自然史標本がもつ意味を多くの方々に認識していただこうと思いました。

昆虫標本の作製においては、収蔵を目的とした成型するような形での展足・展翅がなされるのが一般的です。しかし、左右対称で完璧な姿にするのですが、それでは見えない箇所があったり、その昆虫の本来の動作からすると不自然な姿なのかもしれません。

そこで、昆虫の生き生きとした姿を再現すべく、本来その昆虫がもつさまざまな能力や行動を表現することを目的としました。

「自然史標本で表現する躍動的な昆虫の生態」

今回の助成事業を受け、令和 5 年 3 月 25 日（土）～5 月 7 日（日）まで、自然遊学館の多目的室で、企画展の開催が決まりました。

図1. 3月からの企画特別展示のポスター

「飛ぶ・食べる・争う」などいきいきとした生態的な姿を自然史標本で創り出すことで、本来その生物がもつさまざまな能力や行動を表現することを標本の制作過程や作成した「生態標本」の生きものが暮らしていたの生息環境をジオラマでも再現します。

今回の企画展を通じて、自然史標本の価値とその作製技術の継承を行い、市民の方々に博物館としての機能の重要性と自然環境の大切さを感じとっていただくことができれば幸いです。

最後に、今回の自然遊学館の博物館活動にあたり、助成いただいた一般財団法人全国科学博物館振興財団はもちろんのこと、さまざまな面でご協力いただきました方々に深くお礼申し上げます。

（天満　和久）

「生態標本」作製秘話

もともとこのような標本をつくるきっかけとなったのが、タガメのフィギュアを手にしている鞍井希凪さんに、私の大先輩、岩崎さんが一言。「Kina くんだったら、買わなくても作れるんじゃない？」と。

作れるといってもどうして作るのか。階段状の発砲スチロールを昆虫ごとに合わせたものを先に作らないといけないのかなど、いろいろと頭の中で考えはしたのですが、作成するのはKina くん。

まずは、「こんど、昆虫針とか、三角の台紙とか、渡すからね」と言っておきました。

時が経ち、クビキリギスが死んでしまう季節になった時、Kina くんが「つくってみました。」と一言。見たこともない翅を広げたクビキリギスの標本でした。

自然遊学館内でも展示したいが、どう見せるか。単に標本箱に入れようとしても、高さがあって、普通の標本箱には入らないのです。あたりまえのことです。翅を広げているので、より立体的になっているのです。

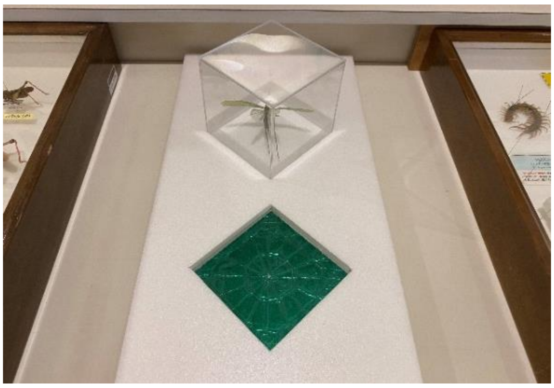


図1. 館内での展示のようす

生きているような姿をした標本をまじかで見てもらいたい。これだけがキーワード。

しかし、現実は残酷なものでした。展示から１週間もたたないうちに、ケースがはずされ、

作ってくれた標本がボロボロになっていました。生きているようで、触ってみたくなる気持ちは非常によくわかります。しかしKinaくんのみんなに見てもらいたいという想い、作成に注がれた苦労、壊すのは簡単だが・・・。口惜しさがあふれ出てきました。この現実をどのように伝えればよいか、月の光の下、涙が出てきました。

あくる日、またまた岩崎さんに相談しました。すると、また一言。「Kinaくんなら、簡単になおすんじゃない？」

私は涙をこらえながら、Kinaくんにお詫びしました。「せっかく、一生懸命作ってくれたものを管理不行き届きで、壊れてしまう結果になってしまって、本当にごめん。」でも、Kinaくんは「また、つくればいいから」と一言。

救われたという気持ちと大きな器を感じざるを得ない気持ちが入り混じりました。実は、昨年、「雌雄モザイクのクマゼミ」を受け取った時もそうでした。

修復準備のため、いろいろなものを用意しました。しかし、Kinaくんは自分のイメージで、どんどん修復作業を進めていきます。顕微鏡の下で修復を行うのかと思いきや、自分の目だけで、折れた触角、もぎ取られた翅、はずれた後脚などをどんどん復元していきました。想像をはるかに超えるスピードとありえないピンセットの使い方。

図2. 壊れた標本の修復のようす

この修復ができるのなら、作成など簡単なものなんだろうと、そして、私が流した涙は何だったのか・・・。しかし、そこには標本がもつ微妙な感覚があったのは事実です。立体的で、壊れるものの儚さもあるけれど、そこには本当の美しさがあるということを改めて感じ取ることができました。

「生態標本」

ふたたび時が経ち、カブトムシが死んでしまう季節となった時、Kinaくんが「つくってみました。」と一言。

図3. カブトムシの飛翔を表現した標本

見せられた標本はまさにカブトムシが空を飛んでいるような姿。岩崎さんも、「跗節の先まで神経がいきわたっている」と。

いろいろと考えて、道具がそろわない中で、自分で考えた方法で作成してくれたのだと思います。

岩崎さんがまた一言。「この標本は、製作過程などもきちんと撮影したうえで、名前を付けないといけない。」

「立体標本」はどうか。インターネット上にはこの言葉はあるけれど、感じも意味合いもまったくちがっています。死んでしまった昆

虫を標本にして生き返らせるということから、「リバイブ標本」はどうか。これもアニメの世界のような感じがするからどうも違います。

そんな時、石橋隆さん（大阪大学総合学術博物館研究員）が「カメラで生きものの一瞬をとらえるようなもの、カメラのない時代にはそれを表現するために描かれた博物画のようなものがあるが、その標本版ね。」と Kina くんに話してくれました。

そしてこの度、やっと鞍井希凪さんが作成する「命の輝きの一瞬を切り取ったような標本」として、「生態標本」と名付けることとしました！

これは「生きているさま：生態」と「死んでしまったもの：標本」の両極のものをわざと組み合わせた造語のようなものです。鞍井希凪さんが 2021 年 8 月に自然遊学館に持ち込んでくれた「雌雄モザイク個体」もまさに複雑怪奇なものでした。今になれば、その延長線上にこのような素晴らしい標本作成があったのか、とも思っています。

（天満 和久）

「貝塚市子ども博士育成事業」を終えて

本年度から始まった「子ども博士育成事業」（『将来専門分野で活躍できる人材を育成するため、天文学・生物学。貝塚の歴史のそれぞれの分野において大学教授らによる講座』、貝塚市 HP より）は市内より抽選で選ばれた 5 名の小中学生が参加しました。ここでは 8 月から 12 月までの 5 回にわたりました講座（生物分野）の概要を報告します。

第一回 8 月 27 日、大阪公立大学理学研究科教授の安房田智司先生「あっ！と驚く魚の生態と知性：最新の研究を学ぼう」海洋環境、寿司ネタになる魚の生活史、今回の主題、魚の認知行動について先生が初めて見た、最新の知見をもとにお話しいただきました。

図 1. 第 1 回講座のようす

第二回 9 月 24 日、和歌山大学教育学部教授（動物生態学）の古賀庸憲先生「ヤドカリの殻交換は協力行動？攻撃行動？」ヤドカリの住居となる貝殻をめぐるヤドカリ同士の闘争についてお話しいただきました。実際のヤドカリの殻交換を、実験的に行う作業も子どもたちが体験をしました。

図 2. 第 2 回講座のようす

第三回 10 月 29 日、大阪公立大学理学研究科教授の伊東明先生「外国から来たセイヨウタンポポがどうして日本中に広がったの？」身近にみられるタンポポの生態や、セイヨウタンポポと日本の在来タンポポの間にできた雑種の広がりについてお話があり、市民の森に出てタンポポを探しその特徴を比べました。

第四回 11 月 29 日、和歌山大学名誉教授（植物生態学）の高須英樹先生「果実と種子の不思議」植物の種子がどのようにして種を保存するため、独自の形態を取っているかを段ボール箱何箱にも詰めてお持ちいただいた実物をもとに、様々な形や大きさの種子を実際に触れて確かめました。

図 3. 第 4 回講座のようす

第五回 12 月 17 日、和歌山大学システム工学部教授の中島敦司先生　「ラクダに食われる？砂漠のマングローブ」紅海沿岸に自生するヒルギダマシは家畜（ラクダ）による被食を受けることで、葉量を調整し、乾燥する年にもマングローブ林を維持している。それには側方に伸長する枝を着床させて不定根を伸ばし、その根から水を先端部に送る。また高い濃度の塩分下でも、樹形を維持することができる。というこれまで知っている植物とは違ったマングローブの振る舞いに驚いていました。

全五回の講座が終了し、受講者全員に修了書が授与されました。

（秋山　芳樹）

泉州生きもの情報

二色の浜でのアカウミガメの死亡漂着

アカウミガメ *Caretta caretta* は甲羅の長さが 90～100 cm程になるウミガメ科の一種です。英名の Loggerhead turtle は「頭でっかちガメ」という意味で、頭が大きく甲殻類や貝類を殻ごと食べる強い顎を持っています。国内では本州、四国、九州から南西諸島で産卵します。

館内で展示しているアカウミガメの剥製は、岬町多奈川沖で 2008 年 6 月 9 日に定置網に掛かって死亡したメス個体と、二色の浜海浜緑地に 2009 年 8 月 7 日死亡漂着したオス個体です。

また、二色の浜の砂浜での死亡漂着は当館が記録している限り、2017 年 9 月 5 日（図 1）、2021 年 6 月 29 日（図 2）、2022 年 12 月 16 日（図 3）の 3 回あり、ここ最近は 2 年連続確認されています。これらの記録はいずれも二色の浜を散歩していた市民の方による電話報告がきっかけになっており、本誌の寄贈情報コーナーに載せています。

2017 年の個体は死亡してから時間が経って、腐敗が進んでいましたが、甲長は約 70 cmでした。2021 年の個体は外傷なしのオスで甲長 87.9 cm・甲幅 64.7 cm、2022 年の個体は背中の甲羅が大きく割れていたオスで甲長 90.3 cm・甲幅 76.2 cm（背甲が割れているため暫定値）でした。

死亡漂着したウミガメを確認した際には、全国のウミガメ情報を収集している NPO 法人日本ウミガメ協議会に情報提供しています。協議会の方は可能な範囲で現地に来られ、詳細なデータを取られています。

図1. アカウミガメ死亡漂着
二色の浜　2017年9月5日

図2. アカウミガメ死亡漂着
二色の浜　2021年6月29日

図3. アカウミガメ死亡漂着
二色の浜　2022年12月16日

謝　辞

2021年および2022年漂着のアカウミガメの計測サイズを教えて頂いた日本ウミガメ協議会事務局の松宮賢佑さんに謝意を表します.

（山田　浩二）

ナギサスズが導く出会い

ウミコオロギとは海岸の岩礁に生息しているコオロギで、翅が無く鳴きません。過去にも貝塚人工島（貝塚市二色南町）でウミコオロギを採集されていたので（岩崎，2012、岩崎，2014）、現状を確認すべく調査をすることとしました。

10月8日、まずは試験的に現地に向かいました。足場が消波ブロックと悪く、手にライトを持って小さな昆虫を探すのは至難の業でした。子どものころはそんな消波ブロックの上を走り回っていたのにと、つくづくバランス感覚も含めてなくなってしまっていることを痛感しました。

そこで、10月16日の日没後、今度は本気で調査に行くこととしました。今回は秘密兵器「ヘッドライト」を装備しての採集です。今回は手が自由に使えるので、さぁ、どれほどの成果があがるのか。調査者は岩崎さんと鞍井希凪さん、そして前回は車で待機していた希凪さんのお母さんも参戦です。どうしても参加したくなったとのことでした。

いろいろあって、遅れてお母さんと私が採集現場に到着した時のことです。不思議な光景が広がっていたのです。岩崎さんと希凪さんがウミコオロギを探す周囲で、若い男性が同じように何かをはいつくばるように探しています。なるほど、ここはピンポイントでウミコオロギ採集の有名な場所なんだと気づきました。虫好きの学生さんも探しにきているんだろう。我々も負けてはいられません。そう思って見ていると、その若い男性の一人が「採れました！」とやってきて、手にそっと握った昆虫を希凪さんのもつ網に入れてくれています。

図 1. 夜の採集のようす

「？？？」

「あ、これはウスモンナギサスズです！」と希凪さんがうれしそうに網からケースに移します。若い男性はすぐにまた消波ブロックの向こうへ飛び跳ねるように行ってしまいました。・・・どういう事？何がおきているのか、さっぱりわかりません。「採りました！」と言っては、また走ってきて希凪さんに渡してくれています。それも楽し気に。実は、希凪さんの昆虫採集のお手伝いをしてくれていたのです。聞いてみると、その 3 人の若者は奈良から来た大学生で、朝まで釣りを楽しむ予定とのこと。ちょうど魚が釣れない時間帯で暇だったので、必死に何かを探している希凪さんが気になって声をかけてくれたようです。「初めは釣りをする場所を取られるかと思ったんですが、手に網を持っているから・・・」と大学生たちは笑っていました。

よく聞いてみると、昆虫にあまり興味もなく、触るのも初めは恐る恐るだったようにも話していました。何気ないきっかけでも、少しでも多くの人に昆虫のような小さな生きものにも関心を持ってもらうことができればと改めて思いました。何かに熱中する姿は、人の心を打つのだと、冷たい潮風の当たる中での少し心が温まる空気感でした。きっと彼らは、これからどこか釣りに行く度に足元にちいさなコオロギが居ないか気にしてくれることでしょう。とても素敵な夜間採集でした。

“たこいし”

今回の記事を書かせていただくにあたり、「テトラポッド」はある会社の製品としての商標登録であるようです。そういえば、絆創膏もいろいろな名前とくに商品名で読んでいることが地域ごとに多々ありますね。

私が小さなころは、まわりのみんなが消波ブロックのことを「たこいし」とか、「テトラ」とかよんでいたように記憶しています。しかし、それが普通だと思っていたことのに全然ちがうといったことがこれまでの人生で多々ありました。「たこいし」もインターネットで調べてみると、たこ焼き屋さんの名称だったり、有名なのは大阪城の巨大な石垣のひとつだそうです。小さな漁村の町で育った私には不思議な空間が広がっていたのでしょう。

参考文献

岩崎拓（2012）ナギサスズ. 自然遊学館だより, No.62:6-7.
岩崎拓（2014）貝塚市の海辺の昆虫. 自然遊学館だより，No.72:1-3.

（天満　和久）

自然生態園でカスリウスバカゲロウの幼虫を発見

2022 年 11 月 12 日、自然生態園での活動を行っている時に、海浜植物のエリアで生きもの調べをしていました。その時、大阪府レッドリスト 2014 で「情報不足」となっているカスリウスバカゲロウの幼虫（いわゆる蟻地獄）を見つけました。

特徴は頭部の裏側にある縦方向に１本の白線があることです。ところが、標本にする前にその決め手となる白線が死んでしまうと消えてしまったのです。そこで、UV ライトで照らしてみることにしました。すると、その種の決め手となる白線がくっきりと浮かび上がりました。

図 1. 死亡した時のようす

図 2. UV ライトを使用して撮影したようす

今後も続けて、自然生態園での調査を続けていこうと思います。

参考文献

林成多 (2013) 島根県と鳥取県西部のアリジゴク. ホシザキグリーン財団研究報告，16:189-205.
池田大・奥井かおり (2017) 兵庫県のウスバカゲロウ. きべりはむし，40 (1) :14-30.

（自然遊学館わくわくクラブ　鞍井 希凪）

自然生態園で見つかった寄生蜂

自然生態園は市民の森の中にある貝塚市の自然生態系（ため池・雑木林・草むら・砂浜）をモデルとして、復元・再生する目的でつくられました。1997 年に「トンボの池」、1998 年に「ドングリの森」、1999 年に「バッタの原っぱ」と「海辺の植物ブロック」が完成して、20 年を超える年月が経つことになります。

そのような場所で、2022 年 12 月という寒い時期に、ヒメバチ科に属する寄生性のハチが 2 種確認されました。ともに、遊学館には記録のないものでした。

まずは、2022 年 12 月 12 日に採集された *Gelis* 属の一種（トガリヒメバチ亜科ハネナシヒメバチ属）ですが、落ち葉などを積み上げてたい肥を作っている場所で澤田智子さんが採集したものです（図 1)。

図 1. ハネナシヒメバチ属の一種

これは種までは同定できなかったのですが、本種が属すグループの名前にもあるように、翅がないヒメバチのメス個体です。また、国内で得られる無翅のヒメバチは 90％以上が Gelis 属であるようです。ハネナシヒメバチ属はいろいろな種の昆虫がつくる小さな繭やクモの卵嚢に寄生する高次寄生蜂で、成虫で越冬するようでした。形態的には蟻によく似ています。

次に、2022 年 12 月 18 日、自然遊学館わくわくクラブの活動時に採集されたジャワホシアメバチ *Enicospilus javanus* (Szepligeti, 1910)（アメバチ亜科ホシアメバチ属）ですが、寄主などの本種の生態的な情報はわかっていないようです。ホシアメバチ属は前翅にある骨片の形状が分類形質の重要な特徴のひとつです（図 2、3)。また、本属の種多様性の中心は熱帯地域にあり、本種も採集地の記録から日本の暖かい太平洋側（神奈川県、静岡県、三重県、京都府、大阪府、兵庫県、広島県、山口県、徳島県、愛媛県、高知県、福岡県、熊本県、鹿児島県）に限られているようです。種名にもあるように、模式産地がジャワ島となっています。オーストラリア区や東洋区にも広く分布しており、形態的なバリエーションも大きく、隠蔽種が含まれている可能性が高いようです（Shimizu, et al, 2020)。

図 2. 前翅にある骨片の形状

図 3. ジャワホシアメバチ

いずれにしても、奥が深い寄生蜂の世界を堪能ください。また、人工的に造成された場所でも時間の経過とともに、これまで市内であまり確認されていなかったような生きものが発見されるなど、市民の皆様とともに貝塚市の豊かな自然の象徴となるような取り組みをこれからも続けていきたいと考えています。

※隠蔽種（いんぺいしゅ）
形態的にほとんど区別できないことなどから、本来は別種であるが、同一種として扱われていた種。交配実験や遺伝子の塩基配列などを調べる分子系統学的な手法で、別種の存在が明らかになることが多い。

引用文献

Shimizu S, Broad GR, Maeto K (2020) Integrative taxonomy and analysis of species richness patterns of nocturnal Darwin wasps of the genus *Enicospilus* Stephens (Hymenoptera, Ichneumonidae, Ophioninae) in Japan. ZooKeys 990 : 1-144.

（天満 和久）

岸和田漁港で水揚げされた カタボシイワシ

2022 年 9 月 24 日、当館の元館長で岸和田市在住の福本泰承さんから「岸和田カンカン横の海で魚がいっぱい浮いているけど、なんの魚かなぁ？」とお電話いただきました。現地に行ってみると、イワシのようなサッパのような傷んだ魚を岸近くまでたくさん確認することが出来ました（図 1）。網ですくってみたところ、すでに腐敗が進んだ状態で（図 2）、何の種類なのかはっきりわからずじまいでした。

図 1. 海面に浮かぶ魚の死体

図 2. 腐敗の進んだ魚

そんな中、昨秋、堺市沖や淀川河口沖での巾着網漁で変わったイワシがたくさん獲れていることを岸和田市にある鰮巾着網漁業協同組合の方からお聞きしました。その後、11 月 17 日に水揚げされたその魚を鞍井依子さんが持ってきて下さいました。全長約 18 ㎝のその魚は、よくよく調べるとニシン科サッパ属のカタボシイワシという種だということがわかりました（図 3）。

鰓蓋上縁に黒点があることが、この和名の由来となっています。マイワシより平べったく、サッパよりすらっとした体形をしています。鹿児島県などで多く水揚げされる南の魚で、大阪府では 2017 年に岬町の定置網に入り、近年、太平洋沿岸で発見例が増えているようです(web 大阪湾の生き物図鑑、大阪府立環境農林水産総合研究所)。

岸和田カンカン横でたくさん浮いていた魚の死体も、写真を照らし合わせると、このカタボシイワシだと合点がいきました。普段、食用としない見慣れぬ魚だったので、漁船から放したものだったのかもしれません。

図 3. カタボシイワシ
（岸和田漁港水揚げ 2022 年 11 月 17 日
採集：堺市沖 巾着網漁）

謝 辞

現地の調査に同行して頂いた高田雅彦さん、大阪湾のカタボシイワシの出現状況についてご教示頂いた大阪府立環境農林水産総合研究所の日下部敬之さんに謝意を表します.

(山田 浩二)

調査速報

せんごくの杜にミヤマホオジロ

2022年の冬、せんごくの杜を訪れた際、ボタン池の少し西側で見た鳥の話です。ナラ枯れしたコナラの枝に止まったシルエットからカシラダカかなと思ってデジカメでズームして見ると、眉の上と喉が黄色いミヤマホオジロでした。4〜5羽の小さな群れでいて、そのうちのオス1羽だけを撮影することができました（図1）。

図1. ミヤマホオジロ（オス）
ホオジロ科、学名 *Emberiza elegans*
貝塚市橋本（標高約50m） 2022年11月5日
冬鳥、平地から山地、全長15cm
大阪府レッドリスト、準絶滅危惧

開けた場所はあまり好まないそうなので、日陰でコントラストがない写真でも、あきらめがつきます。せんごくの杜周辺で昆虫調査をして20年近くになりますが、ミヤマホオジロを見たのは初めてです。もっとも、同所でアオダイショウを見たのも2022年9月24日が初めてだったので、あくまで虫屋の話として聞いてください。

鳥に詳しい方に聞くと、「おそらく立ち寄っただけかも」ということで、実際に、この日以降は見かけることがありませんでした。

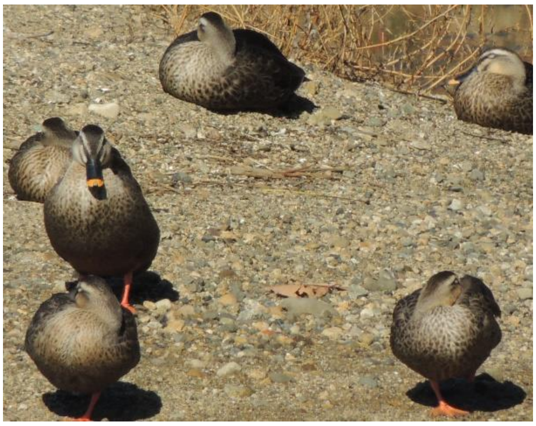
引用・参考文献

『大阪府レッドリスト2014』、大阪府、48pp.
『貝塚の自然 － 自然遊学館創館10周年記念号 －』、貝塚市立自然遊学館、2003年発行、303pp.
『知りたい野鳥が早見チャートですぐわかる！ 日本の野鳥識別図鑑』、誠文堂新光社、2016年発行、335pp.

（自然遊学館わくわくクラブ　岩崎 拓）

貝塚市二色の浜と近木川周辺の鳥調査26

10月から12月にかけて、だんだんと鳥の個体数が増えていき、冬鳥が多く確認できるようになります。近木川河口では、カモの仲間が多く飛来し、公園内にはツグミやモズ、ジョウビタキなどを確認することができます。



カルガモ
（近木川河口　2022年10月28日）

11月頃から、チョウゲンボウが冬の間、確認することができました。行動範囲が広く、見出川近くのヨットハーバーから近木川の臨海線付近までの見ることができました。

チョウゲンボウ
（二色の浜　2022 年 11 月 18 日）

（鈴子 勝也）

追悼

元顧問・保田淑郎先生を偲んで

昆虫のチョウ目コバネガ科を含む小蛾類（比較的小さい蛾の仲間）の分類学的研究に従事され、2000 年～2015 年に当館の顧問であった保田淑郎先生（大阪府立大学名誉教授）が昨年 10 月 1 日にご逝去されました。先生の素晴らしい研究業績は数多くの学術誌にて紹介されていますので、ここでは館スタッフや学生たちだけでなく多くの方々から親しまれた先生のお人柄を、エピソード用いて偲びたいと思います。

●貝塚でナガサキアゲハを採る！

この蝶は、江戸時代には九州以南にしか分布していなかったのですが、近年の温暖化の影響で北上し、現在では大阪でも普通に見られる種です。先生が大学教授職を退官された後に当館の顧問に就任した頃、個人的にも蝶が好きだった先生は「貝塚での分布状況を調べる！」と息巻いて、連日網を持って貝塚市内を走り回っていました。（その結果は、遊学館たより 32 号に掲載）

図 1. ナガサキアゲハを手に在りし日の保田先生

●大きい蛾はしらん！

ある年、先生と一緒に蛾の採集調査をしていた時のこと。ヤガ（大きい蛾の仲間）の一種を捕まえた私は「これの名前なんでしたっけ？」と先生に尋ねると、「大きい蛾はしらん！」と一喝されてしまいました。清々しい程に興味のないものにはまったくは眼中にない先生でした。

●誰よりも心は少年！？

先生がまだ教授職でおられた頃、他研究者の方々や学生を連れてボルネオ島に調査に行かれたそうです。夜に遊びがてらクワガタ採りに夢中になり、誰よりも大きなクワガタを採って連日自慢していたはしゃぎっぷりは大学 OB によって今でも語り継がれています。

●小蛾類研究インフルエンサー

現在は九州大学の教授である広渡俊哉先生からのエピソードです。広渡先生は、助手として保田先生の元に着任した時、蝶の研究をされていました。しかし、日々、保田先生の小蛾類研究に没頭している姿を見て、気づ

くと自分も小蛾類研究の世界にハマっていたそうです。「保田先生は一度も僕に『小蛾類を研究しなさい』とは言わなかったのに」と。現在では、広渡先生を始め多くの弟子が同研究分野で広く活躍されています。

思い出す先生の姿は、目をキラキラさせて捕虫網を手に虫を追いかけている少年のような姿です。館では、いつも他スタッフに気を配ってくださり、行事後にはたくさんのスイーツを用意して私たちを労ってくださいました。

心よりご冥福をお祈りいたします。

（澤田　智子）

館長コーナー

『30周年を迎える自然遊学館』

令和5年10月で貝塚市立自然遊学館は30周年を迎えます。これまで貝塚市民の皆様をはじめ、多くの皆様方に様々なお力をいただきましたことに深く感謝申し上げます。

平成5年に市民の森の施設として開設され、その後、教育委員会の所属の社会教育施設となりましたが、これまでの資料収集、管理、調査・研究、普及、教育・展示の各事業の成果をまとめ本年度申請を行い、大阪府教育委員会より博物館法10条の規定よる登録博物館として公告されました。

3月中旬には館内の里山の動植物ジオラマ改修工事が終了します。今回の改修のポイントは以下の通りです。

① ジオラマ内の動植物の音声解説。選択スイッチは非接触型を使用します。

② ジオラマ内部をLEDライトで照度を上げ、明るいジオラマにします。

③ 新たに大阪湾の魚たちを紹介するケース展示が加わります。

④ 展示がより見やすくわかりやすくなるよう、位置の変更や展示の入れ替えをします。

今回は新しい博物館に向かってのスタートになります。皆様からご意見をいただき、来館される皆様方が貝塚の自然について興味をもってもらう、よく知ってもらう、それらの過程の中でわきでてくる様々な疑問を解決し探求し、分かりやすくなった、また来たいとの言葉を頂けるよう改善をしていきます。

また、場所を問わず自然遊学館にアクセスし、館内の限られたスペースをはるかに超えるデジタル空間の中で、貝塚の生物を中心とした、様々な生体動画等のデジタルコンテンツの蓄積を効率よく行っていくことも課題の一つとしています。その第一歩として、新年度から資料のデジタル化を進め自然遊学館を発信していけるよう、資料のデジタルアーカイブの作成とデジタルミュージアムの整備を始めていきます。いずれにせよ、我々にとっては手探りの部分が多くあります。地域の多様な主体、博物館同士の連携を進め、互いのノウハウやリソースを共有しあうネットワークを形作っていく必要があります。これから10年先どんな博物館になっているかが楽しみです。

それでは皆様のご来館を心よりお待ちしています。

（秋山　芳樹）

皆様からの情報コーナー

寄贈標本

＜植物＞

◆勝矢寛雄さんより
シナアブラギリ　葉 2 点・実 2 点
泉佐野市東佐野台　2022 年 11 月上旬採集

＜哺乳類＞

◆河野通浩さんより
ニホンカモシカの骨（左の角）　1 点
和歌山県有田川上流　2022 年 9 月後半採集

＜鳥類＞

◆湯浅章葉さんより
ツツドリ　死体 1 点
貝塚市二色の浜公園　2022 年 10 月 5 日採集
カルガモ　羽根 1 点
チュウサギ　羽根 1 点
カモメ類　羽根 1 点
貝塚市近木川河口／二色の浜
2022 年 11 月 15 日採集
◆鶴原香さんより
アオバト　死体 1 点
貝塚市西町　2022 年 11 月 2 日採集
◆村井さとみさんより
ダイサギ　羽根 2 点
貝塚市二色の浜　2022 年 11 月 20 日採集

＜爬虫類＞

◆湯浅章葉さんより
コンキンナヌマガメ　生体 1 点
貝塚市見出川河口　2022 年 12 月 5 日採集

コンキンナヌマガメ
（貝塚市では初記録の外来種になります.）

＜魚類＞

◆古川秀明さんより
飼育メダカ　生体約 500 点
2022 年 10 月 2 日寄贈
◆鈴木良実さんより
コウライモロコ幼魚　生体 1 点
大東市灰塚　2022 年 10 月 4 日採集
◆湯浅章葉さんより
ウロハゼ　生体 1 点
貝塚市見出川河口　2022 年 10 月 22 日採集
チチブ　生体 5 点
マハゼ　生体 1 点
貝塚市見出川河口　2022 年 12 月 7 日採集
サヨリ　打上げ死体　1 点
貝塚市二色の浜　2022 年 12 月 28 日採集
◆鞍井依子さんより
カタボシイワシ　1 点
岸和田漁港水揚げ　2022 年 11 月 17 日
◆丸山幸代さんより
ハコフグ幼魚　打上げ死体　1 点
コンゴウフグ　打上げ死体　3 点
ネズミフグ　打上げ死体　1 点
貝塚市二色の浜　2022 年 12 月 19 日採集
ハナハゼ　打上げ死体　1 点
貝塚市二色の浜　2022 年 12 月 26 日採集

◆三宅規子さんより
サザナミフグ幼魚　打上げ死体１点
貝塚市二色の浜　2022 年 12 月 21 日採集
◆田中雅子さんより
ネズミフグ　　打上げ死体１点
貝塚市二色の浜　2022 年 12 月 28 日採集

＜軟体動物＞
◆児嶋格さんより
タテボシガイ　標本２点
ヒメタニシ　標本３点
タイワンシジミ　標本４点
マシジミ　標本２点
滋賀県瀬田漁港　2022 年９月 24 日採集
◆湯浅章葉さんより
ムラサキガイ　生体１点
貝塚市見出川河口付近　2022 年 12 月 16 日採集
ユキガイ　打上げ生体１点
オオノガイ幼貝　打上げ生体１点
キヌボラ　打上げ死体１点
貝塚市二色の浜　2022 年 12 月 28 日採集
◆丸山幸代さんより
フジナミガイ　打上げ生体１点
貝塚市二色の浜　2022 年 12 月 19 日採集

＜甲殻類＞
◆湯浅章葉さんより
モクズガニ　生体２点
クロベンケイガニ　生体１点
貝塚市津田川下流　2022 年 10 月 19 日採集
◆名倉要一さんより
カイカムリ　生体１点
大阪湾淡輪沖　2022 年 12 月５日採集
（淡輪沖約 10km、漁船による採集）

カイカムリ

◆新木陽一郎さんより
クロベンケイガニ　生体１点
貝塚市二色の浜公園　2022 年 12 月９日採集

＜昆虫＞
◆常道武士さんより
ハラビロカマキリ　成虫１点
（ハリガネムシ脱出）
貝塚市澤　2022 年 10 月 13 日採集
◆服部旭さんより
コガタスズメバチ　成虫１点
貝塚市二色　2022 年 11 月 15 日採集
◆湯浅章葉さんより
センダンキバガ　成虫１点
貝塚市見出川河口付近　2022 年 12 月 16 日採集

＜化石＞
◆（故）濱谷巌さんより
三葉虫　１点
アメリカ合衆国ユタ州産
アンモナイト　１点
イギリス Dorset 産
2022 年 10 月 30 日寄贈

寄贈写真

＜昆虫＞

◆兒嶋康成さんより

タイワンタケクマバチ雌雄　4点

熊取町大久保東　2022年12月11日撮影

タイワンタケクマバチ（上♀下♂）

◆田中雅子さんより

アカウミガメ　4点

貝塚市二色の浜　2022年12月16日撮影

打ち上げられたアカウミガメ

スタッフ日誌

10月20日、見出川河口で増えすぎたミシシッピアカミミガメの調査を市民の方が行うというのでお手伝いにいきました。甲羅の長さが20 cmを超える大きな個体を24匹捕らえましたが、護岸の斜面を運搬するのに大変な労力でした。（山）

12月19日、外に展示しているアカミミガメの展示スペースを広くしました。暖かい日には、カメたちは滑り台を上って散歩し、寒くなると滑り台を降りて戻ってくる姿がとてもかわいいです。（澤）

12月22日、ケーブルテレビJ:COMりんくうの「長っと散歩りんくう」という番組が、今回、二色の浜を取り上げるということで、取材に来られました。酒井市長が現地を訪れながら、説明するということで、当館にも来られ、案内役を務めました。（山・天）

自然遊学館だより 2023　冬号（No.105）

貝塚市立自然遊学館

〒597-0091
大阪府貝塚市二色3丁目26－1
Tel.　072（431）8457
Fax.　072（431）8458
E-mail：shizen@city.kaizuka.lg.jp
ホームページ
https://www.city.kaizuka.lg.jp/shizen/
フェイスブック
https://www.facebook.com/sizenyugakukan

発行日　2023.2.28

この小冊子は庁内印刷で作成しています.